

# 図書資料としての「レコード」

佐藤 貢

## Phonorecords as the Library Material

Mitsugi SATO

### 第1章 学校図書館学

我が国で学校図書館学というものが問題となったのは昭和24年頃からであった。文部省から「学校図書館の手引」が刊行になり、昭和25年度と26年の2か年に亘って48名の指導者の養成が実施された。

そしてこれらの人々を中心として我国では学校図書館学を構義することになったのは、学校図書館法が昭和28年に成立したその翌年からであった。

文部省は先ず初年度の昭和29年になって東京学芸大学と、大阪学芸大学の国立大学2校に於て学校図書館学の講義を開始することになったのである。

昭和30年には、北海道学芸大学、東北大学、千葉大学、東京学芸大学、横浜国立大学、福井大学、信州大学、愛知学芸大学、京都学芸大学、山口大学、香川大学、九州大学、宮崎大学の14の国立大学が講義を実施することになった。

更に昭和31年になると、北海道学芸大学、岩手大学、秋田大学、山形大学、宇都宮大学、茨城大学、群馬大学、東京学芸大学、新潟大学、福井大学、愛知学芸大学、三重大学、神戸大学、岡山大学、広島大学、愛媛大学、高知大学、大分大学、鹿児島大学の19の国立大学で開催することになったのである。

以上昭和29年から昭和31年度迄に国立大学で29校が学校図書館学の講義を開設し、科目と単位数は次の如く7科目8単位を修得した者に司書教諭免状を文部省は下附することにしたのである。

学校図書館通論	1 単位
学校図書館の管理と運用	1 単位
図書の選択	1 単位
図書の整理	2 単位
図書以外の資料の利用	1 単位
児童生徒の読書活動	1 単位
学校図書館の利用指導	1 単位

以上7科目8単位が司書教諭講義の内容である。私は昭和30年度に福井大学で「学校図書館の利用指導」の講義を依頼され、翌昭和31年度に「図書の整理」の講義を三重大学で開始することになったのである。

以来三重大学では昭和48年度迄、「図書の選択」「図書以外の資料の利用」「児童生徒の読書活動」「学校図書館の利用指導」の4科目を講義して来たのである。

以上の科目内容の中で私にとって一番調査研究が不充分であったのは、レコードに関する研究であった。「図書以外の資料としてのレコードの問題」「レコードの分類」等が一番私をなや

ませた問題点となっていたのである。

私が約20年間講義資料として来たレコードに関する文献として参考として今日迄座右に置いて参考にして来た書物は次の如きものである。

1. 新教育協会「文部省選定鑑賞用音楽レコード解説全書」総論. 村田武雄, 昭和24, 新教育協会刊.
2. 新教育協会「文部省選定鑑賞用音楽レコード解説全書」小学校. 柴田知常, 昭和24, 新教育協会刊.
3. 新教育協会「文部省選定鑑賞用音楽レコード解説全書」中学校. 有坂愛彦, 昭和24, 新教育協会刊.
4. 小川昂「レコードはいかに整理するか」音楽之友社, 昭和25年刊.
5. 波多野完治監修「レコード」視聴覚教育新書4, 金子書房, 昭和27.
6. 全国学校図書館協議会「レコードの整理」小川昂執筆, 明治図書, 昭和28.
7. 黒沢隆朝外, 「音楽鑑賞指導資料集成」「全4巻」全音楽譜, 昭和29.
8. 大木正興「レコード読本」河出書房, 昭和30.
9. 小川昂「本邦音楽関係図書目録」音楽之友社, 昭和32.
10. 志鳥栄八郎外「名演奏家とそのレコード」全音楽譜, 昭和32.
11. 野村光一, 「LPレコード案内」創元社, 昭和32.
12. 服部竜太郎「名曲のLP総案内」音楽之友社, 昭和32.
13. 真篠将「レコードによる小学校音楽鑑賞指導 | 全学年用」全音楽譜出版社, 昭和32.
14. 文部省「初等教育事例集6 音楽科編」東洋館出版社, 昭和32.
15. 文部省「初等教育指導事例集9 音楽科編(2)」教育出版株式会社, 昭和32.
16. 志鳥栄八郎「大作曲家とそのレコード」全音楽譜, 昭和33.
17. 野口善太郎「幼保小学校低学年用レコードによる幼児の生活指導12ヶ月2巻」全音楽譜出版社, 昭和33.
18. 野村良雄「西洋音楽史 | アルヒーヴ, レコードによる音楽史(上)」日本グラモフォン, 昭和33.
19. 野呂信次郎「学年別名典の事典」牧書店, 昭和33.
20. 真篠将「レコードによる中学校音楽鑑賞指導 | 全学年用」全音楽譜出版社, 昭和33.
21. 村田武雄「レコードの選択と鑑賞 | 続レコードのある部屋」音楽之友社, 昭和33.
22. 文部省「初等教育指導事例集(17) 音楽科編(3)」教育出版株式会社, 昭和33.
23. 文部省「高等学校芸術科音楽指導書音楽史編」博文堂出版株式会社, 昭和33.
24. 野村良雄「西洋音楽史(下)」日本グラモフォン, 昭和34.
25. 中野義見外「文部省選定, 鑑賞レコード解説全書, 小学校編」音楽之友社, 昭和35.

## 第2章 レコードの歴史

レコードの歴史というと, 1877年(明治10年)の8月12日の朝トーマス・アルヴァ・エジソンは一枚の設計図を, 彼の機械工場を, 彼の機械工場の監督をしているジョン・クルーンに渡したのである。

翌日第一号機が出来上り, エジソンはこの円筒(シリンダー)に薄い錫箔を巻いた。そしてこれに針をとりつけ, 軸をゆっくり手でまわしながら針のもとになっている口から童謡を聞いたのであった。これがレコードの誕生といわれている。

Mary had a little lamb Its fleece was white as snow and ev'ry-where that  
Mary went, The lamb was sure to go

このレコードは以上の童謡であった。

「メリーは1匹のかわいらしい小羊を持っていました。その毛は雪のように白くありました。そしてメリーの行くところへはどこへもかならずついて行きました——」

このことがあって、エジソンが1877年11月に蓄音機の特許を得てから約100年間に機械の進歩ばかりでなく、レコードの発達はそれを上廻って実演に近づいて来たのである。

#### (1). 蠟管時代

最初レコードは円筒（シリンダー）に録音され、それは録音と再生とを兼ねていたのである。

エジソンはこれをはじめ、話の記録と伝達とを目的として創案したのであったが、間もなく音楽が録音されるようになったのであった。

然し蠟製の円筒（シリンダー）に録音することでは複製が多量に出来ないし、普及率が極めて乏しかった。

1887年にワシントンのエミール・ベルリナー（Emile Berliner）が平丹の母型（マドリックス）から幾枚でも複製しうる平丹盤を発明してからこれが大量に生産されるようになって、1900年までにアメリカではレコードの商業価値が著しく高まってきたのである。

音楽レコードを最初に録音したのは1889年3月20日、ストックホルムに生れたスエーデンのソプラノ歌手のジューグレット・アーノルドソンであるといわれているし、又ブラームスも録音し、ジェニーリンドも吹込んだと半ば伝説的にいわれているが、その真偽のほどは別として、1889年頃から音楽が録音されはじめたことは疑いない。

#### (2). 平丹盤時代（旧吹込レコード）

しかし実際上の活動はベルリナーの平丹盤が商業化された1900年以降のことであった。

1901年にはロンドンに「グラモフォン・アンド・タイプライター会社」が設立されて、これが動機となってフランス其他のヨーロッパ諸国に蓄音機会社が設けられて、ここに名歌手のレコード吹込時代が到来したのであった。

この1900年から1924年までを、レコード研究会では「電気吹込以前のレコード」又は、旧吹込レコード」と称しているのである。

1900年頃は声楽が中心であって、カルヴェヤやカルソーヤ、シャリアピンなどが自作の演奏を録音したのである。

アメリカのコロンビア蓄音機会社は1887年に設立した、ビクターは1898年から試作をはじめ、1901年から積極的な活動を開始したのである。

コロンビアが、ゼンブリッヒヤ、シューマン、ハインクを出せば、ビクターはホーマーやプランソンを出して華々しい歌手の録音時代を現出したのである。

1905年頃から小管弦楽の伴奏による歌曲が録音され、歌劇や楽劇の全曲の録音がなされるようになったのである。

そして1910年頃にはエルマンやクライスラー、パハママンやパデレフスキーの独奏も豊かに聴けるようになったのである。

最初の管絃楽曲の録音は1917年にストック指揮のシカゴ交響楽団、クンツ指揮のシンシナティ交響楽団、ストラビンスキー指揮のニューヨークフィルハーモニー管絃楽団がワーグナーや、ベートーヴェンの作品の抜粋を演奏したものだといわれているのである。

ストコフスキーは1919年から、トスカニーニは1921年からそれぞれ録音をはじめたのである。

しかし「旧吹込レコード」はせいぜい350サイクル (cycle) から3000サイクル位までの周波数しか録音できず、又回転速度も会社によってまちまちで、70数回転から80数回転まで開きがあって統一がなかった。

したがって実演からは遙かに遠く、いわゆる「カンヅメ音楽」として軽蔑されたのであった。

### (3). 平丹盤時代 (電気吹込レコード)

1904年からはじまった無線電話の研究が実を結んで、1910年1月20日、メトロポリタン (Metropolitan) 歌劇場の舞台から「カヴァレリアルスティカーナ (Cavaleria Rusticana) と、「パリアッチ」のアリア (aria) が放送された。

ラジオの開始は、レコードの録音組織にも大革命をひきおこすこととなった。

即ちマイクロフォン (microphon) の応用に依って、30サイクル (cycle) から5500サイクルまでの周波数を録音することが可能になったのである。

これは「旧吹込レコード」よりはるかに実演に近いものとなって、これが実用化された1924年以降のレコードを「電気吹込レコード」と称するようになったのである。

回転数も一分間に78回転と80回転に統一され、レコードの大きさも10吋と12吋が標準と定められたのである。電気吹込はレコードを急激に発達させたばかりでなく、蓄音機工業をも刺戟して従来のマイカ式サウンド・ボックス (sound-box) からジュラルミン式サウンド・ボックスに移り、金属性の朝顔式のラッパは響鳴を音響学的に考案した木製その他合成物質による組織に変わって、著しく音響の真実性を加えたのである。

その結果、電気吹込以前の声楽中心が器楽中心に移って、交響楽や室内楽の全曲レコードがアルバム入りで出され、レコードの曲目が急速に増加したのである。

一方レコードの盤質が改良され、針音や雑音のない良質のシェラック (shellac) が材料に選ばれ、又間に紙を入れて雑音を消す方法も考えられるようになった。

又、レコードの質の改良からレコードをいためない針の研究が進んで、竹針や象牙針が銅鉄針の他に流布し、それに刺戟されて、銅鉄針の質ばかりでなく、音量による数種の針や長時間針などが出来るようになった。

### (4). 長時間レコード時代

1939年から研究を開始して1948年6月に実用化したコロムビア会社の長時間レコードは、レコードを全く一変させる大改良であった。

発案者はピーター・ゴールドマン (Peter Goldman) 博士であった。従来の3・4分毎に切断されるレコード組織を改良しようとしたのがその動機であったのである。

1932年頃に、アメリカのビクターは回転数を33回転3分の1に落して、ベートーヴェンの「交響曲第五番」をストコフスキー (Stokowski) 指揮のフィラデルフィア交響楽団の演奏で12吋面に吹込みしたことがあったが、これがヒントとなって、回転速度は33回転3分の1とし、レコードの材質に硬物質のヴィニール、プラスチックを使用することによって針音を除くことに成功し、且つ微粒子物質なので溝の細かい録音が可能なために、いっそう長時間の吹込が出来ることになったのである。

かくして1948年に完成したのが今日のLPレコード (長時間レコード) である。

註, Long playing Record (LPレコード) 又録音はテープレコーダー (Tape-recorder) の発明によって, 20サイクルから15000サイクルまでの周波数を録音することができるようになったのである。

これは楽音の全音域を完全に録音しうることを示すもので, LPレコードは実演さながらの再生が可能となったのである。

そこで蓄音機の急激な改良が行われて, ハイ・ファイ (High Fidelity), HiFi の時代を現出することになったのである。

コロビアのLPレコード組織は, 1950年3月にRCAビクターを採用したのをはじめとして欧米諸会社がこれに追従して, わずか数年間に殆んど従来の78回転のレコードは世界のレコード生産市場から姿を没するにいたったのであった。

それで「LPレコード」に対して従来の78回転レコードを「Standard Playing Record」即ち「SPレコード」(標準型レコード) と称するようになったのである。

一方, 1949年1月にはRCAビクターは45回転による7吋レコードを発表したのである。

これは録音と製法は長時間レコードと同様ではあるが, 従来の12吋1枚分に相当する分量をわずか7吋の小型レコード(形がドーナツに似ているところから俗に「ドーナツ盤」と称する)に録音し得て, しかも音質が最も歪みのない状態で再生されるので, 通俗曲や短い楽曲の録音に適するところから, 長時間レコードと共に愛用されるようになったのである。

その後, コロビアが1950年からこの組織をとり入れたのをはじめとして, 諸会社が「45回転レコード」を発売するようになったのである。

そこで「蓄音機」(Gramophone) の名称の代りに「再生機」(Reproduce) の名のもとに78回転, 33回転3分の1, 45回転の3種の回転の切り換えが簡単に出来る3スピードのプレイヤー(演奏機)(three-speed player) のついた装置が流布されるようになり, 針もサファイア(sapphire) や, ダイヤモンドの硬質のものが用いられた, 優秀なカートリッジ(cartridge) が製作されるようになった。

そこへSPレコードを78回転のままより長い演奏に耐えるものとするために ドイツで, 可変溝レコード(Variable Micrograde) (略してVM) 又は, Variable Grade (略してVG) が考案され従来のSPに比して二倍近い演奏時間が可能になったのである。

これがドイツのグラモフォン Gramophone やテレフンケンのレコードに採用されると, この方法を45回転盤にも応用して「EPレコード(延長レコード Extended playing Record) が出来, 7吋レコードの片面にこれまでの12吋両面分が録音されることになって, 45回転盤がいっそう重要視されるようになったのである。

一方に於て, テープ録音組織によって原音を忠実にとらえ, HiFiの再生機に依って原音さながらの再生をして, LP12吋の両面で50分, 10吋両面で30分までの演奏が可能になったのである。

この長時間レコード時代は, 過去78年の蓄音機とレコード史上にはなかつて見ることの出来なかつた機械音楽の世紀を現出したと云っても過言ではないと思う。

これに依って, 我々が音楽史上にその名のみを知っていたいろいろの作品や, 又現代の新しい作品を長短にこだわることもなく, 聴取しることが出来るようになったのである。

そして, いかなる国における演奏も簡単にテープ録音にすることが出来るようになってから, 有名無名にかかわらず多くの演奏家の演奏をレコード化することが出来るようになって,

レコードの曲目が夥しく増大してきたのである。

又テープの操作から音を自由に処理することが出来るので、実演では不可能な完全な技術的表現だとか、又特殊な音の機成が可能となってきたのである。

したがって、レコード音楽の特殊性という方面が顕著になってきたのである。

以上私はレコードに就て、

- (1). 蠟管時代
- (2). 平円盤時代（旧吹込レコード）
- (3). 平円盤時代（電気吹込レコード）
- (4). 長時間レコード時代

の4期に分けて解説したのであるが、レコード時代史を論ずる学識者にはもっと新しい区分をたてて論じたのがいいと思う人がいるかも知れない。

### 第3章. レコードの分類

図書館のレコードの分類は、目録（カード）上の分類でもあれば、また同時に書架上の分類でもあるわけである。

したがって図書の扱われた内容や形式は、分類目録によって知ることもできれば、分類配架された書架上でも知ることができるのである。

すなわち、図書の分類表は、目録のためのものであると同時に、書架配列のためのものであるが、しかしレコードの場合はそうではなく、分類はあくまでも目録（カード）のためのものであって、キャビネット（書架）分類のためのものではないのである。

したがって、レコードの分類表も、もっぱら目録（カード）のためのものであるという性格をもっているのである。

図書の日本十進分類法に対応するレコードの標準分類表は、まだわが国では採択されるにいたっていないのである。

レコードの分類をNDCに準拠しようという考え方は、いくつかは行なわれているが、しかし、レコード内容とその利用の約90%が、音楽によって占められている現実では、分類をNDCに準拠させようとするには無理があるのである。

むしろ、NDCの構成に拘束されないで、専門分類表として独自の展開を行なったほうがより实际的ではあると思われるのである。

そこで私は20年間レコード分類表として小川昂立案のレコード分類表に従って講義もすすめて現在に至ってしまったのである。

次の分類表がそれである。

#### レコード分類表

000 総記	100 声楽
200 宗教音楽	300 器楽独奏
400 器楽重奏	500 器楽合奏
600 邦楽	700 演芸
800 演劇	900 特殊

細目表

- 000 総記
- 010 音楽理論の解説および実技の指導
- 020 音楽史
- 080 電氣的, 機械的處理による作品  
(ミュージックコンクレート, 電子音楽, などをここに分類する)
- 090 貴重レコード
- 100 声楽  
(ここには世俗の声楽曲を分類し, 宗教的声楽曲は200に分類する. また歌唱法, 発声法などの指導, 解説はここに分類する)
- 110 独唱  
(歌曲, バラードおよび歌劇中のアリア, 連編歌曲中の個々の曲などの独唱は, すべてここに分類する)
- 120 重唱  
(二重唱, 三重唱, 四重唱など)
- 130 合唱  
(独唱, 重唱を含むものもここに分類する)
- 140 歌劇, 楽劇, 喜歌劇
- 150 付帯音楽, 音楽しばい, など
- 160 少女歌劇, レビュー, ショー
- 170 バレー音楽, 無言劇, 仮面劇
- 180 民族音楽  
(声楽, 器楽に関係なく, 各国の国歌祝祭歌, など, および民謡をここに分類する. 必要に応じて日本に関するものは181に, 外国に関するものは182に細分する)
- 181 日本  
(必要に応じて県名の五十音(ABC)順に配列してもよいし, NDCにより地理区分してもよい)
- 182 外国  
(必要に応じて国名, あるいは民族名の五十音(ABC)順に配列してもよいし, NDCにより地理区分してもよい)
- 190 特殊な歌  
(独唱, 合唱を含む)
- 192 学校唱歌, 童謡
192. 1 わらべうた, 181に分類しここに重出する
- 193 校歌, 学校歌, 寮歌, 応援歌
- 194 労働歌, 職業歌, 団体歌  
(県民歌, 市民歌などもここに分類)
- 195 軍歌
- 199 流行歌  
(歌謡曲, シャンソン, 映画主題歌などを分類するが必要に応じてそれぞれに展開する)
- 200 宗教音楽
- 210 独唱
- 220 聖歌 An'hem Chant
- 230 サービス, 礼拝曲 Service Liturgy
- 250 詩篇 Psalm
- 260 ミサ曲, レクイエム Mass, Requiem
- 270 賛美歌, 賛歌 Hymn
- 280 聖譚曲, 交声曲, 受難曲  
Oratorio, Cantata, Passion
- 290 キリスト教以外の宗教的音楽  
(日本の仏教音楽は620に分類)
- 300 器楽独奏  
(器楽曲, 楽器の解説もここに分類)
- 310 管楽器
- 311 フルート, ピッコロ
- 312 オーボエ
- 313 クラリネット
- 313 .1 サクソフォーン
- 314 バスーン
- 315 ホルン
- 316 トランペット, コルネット
- 317 トロンボーン
- 319 その他の管楽器
- 320 弓を使わない弦楽器
- 321 ハープ
- 322 リュート
- 323 ギター
- 324 マンドリン
- 325 バンジョー

- 326 チター
- 329 その他
- 330 弓を使う弦楽器
- 331 古代弦楽器
- 332 バイオリン
- 333 ビオラ
- 334 チェロ
- 335 ダブルベース
- 339 その他
- 340 けんばん楽器 (鍵盤楽器)
- 341 古代けんばん楽器  
(ハーブシコード [クラブサン, チェンバ  
ロクラビコード])
- 342 ピアノ
- 343 バイブオルガン
- 344 ハーモニウム
- 347 電子オルガン  
(ハモンドオルガンなど)
- 349 その他
- 350 打楽器
- 351 木琴
- 352 ビブラフォーン
- 359 その他
- 360 機械楽器
- 361 ピアノラ, オルゴール
- 369 その他  
(テレミン, ミュージックシンセサイザー  
など)
- 391 アコーデオン
- 392 ハーモニカ
- 400 器楽重奏
- 420 二重奏
- 421 管楽器
- 423 弓を使う弦楽器
- 424 ピアノと「弓を使う弦楽器」
- 428 ピアノ二重奏
- 429 その他の二重奏
- 430 三重奏
- 431 管楽器
- 433 弓を使う弦楽器
- 434 ピアノと「弓を使う弦楽器」
- 439 その他の三重奏
- 440 四重奏
- 441 管楽器
- 443 弓を使う弦楽器
- 444 ピアノと「弓を使う弦楽器」
- 449 その他の四重奏
- 450 五重奏
- 460 六重奏
- 470 七重奏
- 480 八重奏
- 490 九重奏以上の重奏
- 500 器楽合奏, 協奏曲
- 510 管弦楽
- 511 交響曲, 小交響曲
511. 2 組曲, 喜遊曲, 夜曲など  
(組形式のもの)
- 512 交響詩, 大幻想, 狂詩曲
- 513 声楽 (あるいは朗読) つき管弦楽曲
- 514 変奏曲, シャコンヌ, パッサカリア
- 515 序曲, 前奏曲, 間奏曲  
(歌劇中のもの, 演奏会用のものとともに  
ここに分類)
- 516 接続曲, パラフレーズ 描写曲, 抜粋曲
- 517 舞踊曲  
(舞踊組曲は511. 2へ分類)
517. 1 クラシック  
(必要なときは曲種例ガボット, ワルツな  
どの五十音 (A B C) 順に配列する)
517. 2 ダンス音楽
- 518 行進曲
- 519 その他の管弦楽曲
- 520 協奏曲
- 521 管楽器
521. 1 フルード
521. 2 オーボエ
521. 3 クラリネット
521. 31 サクソフーン
521. 4 バスーン
521. 5 ホルン



521. 6 トランペット
521. 9 その他の管楽器
- 522 弓を使わない弦楽器
- 523 弓を使う弦楽器
523. 1 古代弦楽器
523. 2 バイオリン
523. 3 ビオラ
523. 4 チェロ
523. 5 ダブルベース
- 524 けんばん楽器(鍵盤楽器)
524. 1 古代けんばん楽器  
(ハープシコード〔クラフブサン, チェンバロ〕クラビコードなど)
524. 2 ピアノ
524. 3 パイプオルガン
524. 4 電子オルガン  
(ハモンドオルガンなど)
- 525 打楽器
525. 1 木琴
525. 2 ビブラフォーン
- 529 その他の楽器  
(日本の楽器による協奏曲もここに分類)
- 530 弦楽奏
- 540 吹奏楽合奏
- 550 アコーディオン合奏
- 553 ギター合奏
- 554 マンドリン合奏
- 555 バンジョー合奏
- 560 ハーモニカ合奏
- 590 その他の合奏
- 600 邦楽
- 610 雅楽, 舞楽
- 611 管弦
- 612 歌いもの  
(久米歌, 東遊, 大和歌, 催馬楽, 朗詠)
- 620 仏教音楽
- 621 声明(しょうみょう)
- 622 和賛, 御詠歌
- 630 能, 狂言
- 640 琵琶
- 641 平曲
- 642 盲僧琵琶
- 643 薩摩琵琶
- 644 筑前琵琶
- 650 箏曲, 三曲合奏
- 651 尺八, 箏  
(三弦を含むものは650に分類)
- 659 諸種の琴曲  
(一弦琴, 二弦琴, 七弦琴, 月琴, 胡弓など)
- 660 唄物(うたもの)
- 661 地唄  
(唄と三弦だけここに分類し, 箏, 尺八を含むものは650に分類する)
- 662 長唄, めりやす
- 663 萩江節
- 668 俗曲  
(端唄, 哥沢, 小唄, 都々逸, 大津絵, 二上り新内, 浮世節)
- 670 浄瑠璃
- 671 義太夫節
- 672 一中節
- 673 河東節
- 674 宮蘭節
- 675 繁太夫節
- 676 新内節
- 677 常盤津節
- 678 富本節, 清元節
- 679 説教節, 浪花節
- 680 郷土囃子  
(郷土楽, 田楽, 獅子舞, 鹿踊, 山車囃子, 祭礼囃子, 相撲囃子)
- 690 和洋合奏  
(日本楽器と洋楽器の合奏, ただし「三味線協奏曲」などは529へ分類)
- 700 演芸
- 710 詩吟
- 720 詩, 和歌, 俳句, 脚本, などの朗読
- 730 講談
- 740 落語, 漫談, 漫才
- 750 物語, 映画説明
- 760 紙しばい, スケッチ

790	その他の演芸	900	特殊
800	演劇	910	講演, 演説, あいさつ
810	芝居噺子	920	経文, 法話
820	歌舞伎劇	940	語学
830	新派劇	950	珠算
840	新劇, 外国劇	960	体育, 遊劇
850	レコード劇, 放送劇	970	擬音, 郊果
860	児童劇, 学校劇, おとぎ歌劇	980	実況
890	その他の演劇	990	その他の特殊レコード

レコードも図書の分類と同様に, その数も増加して来ているので, 小川昂氏等が中心となつて, レコード分類表が試案として学会でも問題としてとりあげられて来たものであった。

今この分類表により次の如きものを分類するとなると, 次の如き記号で表現されることになるのである。

「オーケストラの楽器」	300
白鳥 (チェロ独奏)	334
バイオリン協奏曲	523. 2
スケーターズワルツ (管弦楽)	517. 1
— (アコーディオン独奏)	391
森のかじや (吹奏楽)	540
喜歌劇「詩人と農夫」序曲 (管弦楽)	515
調子のいいかじや (クラブサン独奏)	341
軍隊行進曲 (管弦楽)	518
— (ピアノ独奏)	342
サンタルチア (テノール独唱)	110
歌劇「歌劇「カルメン」闘牛士の歌 (バリトン独唱)	110
歌劇「魔弾の射手」狩人の合唱	130
勸進帳 (長唄)	662
フォスターメロディー集 (独唱重奏合唱)	130
さくら変奏曲 (箏独奏)	650
アンダンテ・カンタービレ (弦楽四重奏)	443

尚, レコード分類表案などに関しては我国の図書館学界では次の如き主要な参考になる論文がこれまでに発表になっている。

上田敏克「レコードの整理その後」(図書館界, Vol. 5, p. 117, 昭和28)

遠藤英三「小, 中学校用レコードの分類表と分類規程, 1960」(図書館界, Vol. 12, p. 151-155)

緒方良彦「レコードの目録規則と分類表」, 昭和30」(図書館学, NO. 2 p. 66-79)

小川昂「私のレコード分類表について」(昭和28, 学校図書館, NO. 31, p. 35-38)

田辺久之「レコードの分類表」昭和29, (図書館界, Vol. 6, p. 33-40)

渡辺嗣夫・竹熊武久, 「レコードの整理について」昭和37 (図書館学, NO. 11, p. 28-33)

以上が主な学会誌に載っているものであるが, 私は現代の状勢から見て図書がNDCを決定公認した如く学界も各学界の協力を得て日本レコード分類表を統一して公式に決定して欲しいと思っているのである。